

児童用の他律的（随伴性）セルフ・エスティーム尺度の開発

一尺度の信頼性と妥当性の検討，そして教育への適用の考察—

○賀屋育子（兵庫教育大学）
横嶋敬行（兵庫教育大学）
山崎勝之（鳴門教育大学）

山口悟史#（鳴門教育大学）
内田香奈子（鳴門教育大学）

キーワード：他律的（随伴性）セルフ・エスティーム，児童，信頼性・妥当性

目 的

セルフ・エスティーム (self-esteem) は、人の健康・適応を高める役割を持つ心的特性として、重視されてきた概念である。その一方で、近年その効用に対して否定的な知見もみられ (Baumeister et al., 2003)，概念と測定法の観点から適応的側面と不適応的側面を弁別的に捉える研究が展開されている。

山崎ら (2017) は、適応的側面を自律的セルフ・エスティーム、不適応的側面を他律的セルフ・エスティームと提唱して研究を進めている。また、前者は非意識の測定法の必要性が論じられ、横嶋ら (2017) によって潜在連合テストを用いた測定法が開発されている。一方で、後者は Deci & Ryan (1995) の随伴性セルフ・エスティームとほぼ同義の概念に位置づけられ (山崎ら, 2017)，外的な達成基準や他者との比較に依存して高まるセルフ・エスティームと定義される。また、随伴性セルフ・エスティームの測定方法には、Crocker ら (2003) の自己価値の随伴性尺度 (領域別、多因子) や、Paradise & Kernis (1999) の随伴性セルフ・エスティーム尺度 (全体的、単因子) の尺度が開発されている。他律的セルフ・エスティームは、単因子構造の測定法による研究が優先的に推奨されることから後者の尺度の使用が挙げられるが、その因子構造を再検討した研究では、単因子ではなく多因子が妥当という指摘がある (Schwinger et al., 2015)。実際の項目表現をみても、特定の領域を表す項目が散見されることから、内容的妥当性の面でも課題がわかる。そこで、本研究では、学校場面で使用することを想定した児童用他律的セルフ・エスティーム尺度 (Heteronomous Self-Esteem Scale for Children: HSES-C) の開発を行い、因子構造と内的整合性の検討、および担任教師の児童ノミネートによる妥当性の検討を行った。

方 法

調査時期・調査対象 調査は 2017 年 1 月と 5 月に実施された。小学校 (2 校) の 4 年生から 6 年生 349 名 (男児 183 名、女児 166 名) を対象に実施した。また、各クラスの担任教師 13 名を対象に、児童ノミネートを行った。分析には、統計パッケージ IBM SPSS Statistics 23 を使用した。

他律的セルフ・エスティーム尺度 尺度項目は、心理学を専門とし、他律的セルフ・エスティーム

の概念に精通した大学教員 1 名、博士課程学生 1 名、修士課程学生 6 名によって内容的妥当性に配慮しつつ、「わたし (ぼく) は、友だちよりも、よいところを多くもっている」など 8 項目を原尺度項目として作成した。評定の方法は、「1. まったくあてはまらない」から「4. とてもよくあてはまる」の 4 件法とした。

児童ノミネートの基準と項目 本質問紙の妥当性を検討するため、他律的セルフ・エスティームが高い児童の特徴を「競争意識が高く、他の児童のできや結果が気になる特徴をもつ児童」とし、この特徴に対して最も当てはまる児童と最も当てはまらない児童を担任教師に 3 名ずつ (男女を問わず) 選出してもらった。選出された児童は、男子 50 名、女子 26 名であった。

結果と考察

探索的因子分析と検証的因子分析の結果から、項目 2 を除外した計 7 項目構成が最も適合度の高い構成であることが確認された。その適合度は、全体では GFI=.979, AGFI=.958, RMSEA=.053, 男子では GFI=.969, AGFI=.937, RMSEA=.059, 女子では GFI=.979, AGFI=.957, RMSEA=.000, であった。また、 α 係数は全体で $\alpha = .80$ 、男子が $\alpha = .80$ 、女子が $\alpha = .82$ となり十分な内的整合性が確認された。

妥当性の検討では、性×群 (当てはまる、当てはまらない) の 2 要因の分散分析を行った (表 1)。その結果、群の主効果が有意となり ($F(1, 72) = 6.05, p < .05$)、「当てはまる」に選出された児童よりも「当てはまらない」に選出された児童の他律的セルフ・エスティーム得点が高い結果となった。このことから、他律的セルフ・エスティーム尺度の基準関連妥当性の一部が示された。

表 1 ノミネート児童の他律的セルフ・エスティーム尺度得点における男女別ならびに全体の平均値 (カッコ内 SD) と分散分析の結果

	ノミネート				性 F 値 (df=1/72)	群 F 値 (df=1/72)	交互作用 F 値 (df=1/72)
	当てはまる		当てはまらない				
	平均	SD	平均	SD			
男子	18.35	(4.30)	14.85	(3.95)	.80	6.05 *	.83
女子	18.33	(4.84)	16.73	(4.03)			
全体	18.34	(4.46)	15.39	(4.01)			

** $p < .01$, * $p < .05$

n = (当てはまる児童: 38 名, 当てはまらない児童: 38 名)